

1 はじめに

舞姫の登場人物について語られる議論といえば、
周りの友達に豊太郎と相沢についてのことばかり…
エリスがどうのこうのといった議論はあんまりされてません。
このままじゃ何か面白くないッ…てことで思い付いたのがこのテーマ。
「舞姫をエリス視点でリライトしてみる。」
どうせならエリスに対して思いっきり違う印象を受けてもらいましょうってことで。
一応、ストーリー的には舞姫と同じようになっています。
ただし、エリスに対して好印象を持っている方は要注意です。
おそらくイメージを崩壊させてしまいますから。
この文章を読んでエリスの見方を180度変えて頂けると光栄です。
それでは、どうぞ。

2 本論

薄暗い闇のもと、今日もまた一日が過ぎていく。
門の下にはうなだれる私がいるだけだ。

今日のはっきり言って良くない日だった。
そもそも、私の人生の中にいい日なんて滅多にない。
どうしてかといえば、私は一日の殆どを劇場の中で過ごしている。
踊ることだけが私の仕事だ。
ちなみに、性格の悪い座長に叱られてばかりである。

「まったく。座長なんて何でこの世にいるのやら…」

ふと悪口をもらす。虚しいだけだったが。
まあ仕方のない話だ。私はいつもの場所で落ち込んでいるだけなんだから。
…何もすることがない。
悩んだ挙句、とりあえず思いっきり泣くことにした。
少しは気分が晴れるかもしれない。

————「あの…大丈夫ですか？」

突然の声に思わず体をびくりと震わせる。

どうやら泣いているのを見られたらしい。

おそるおそる声の方を向いてみた。

「初めまして。泣いているところ失礼します。」

声の主は見慣れない東洋人だった。見た感じ二十代半ばといったところか？

それにしても、達者にドイツ語を話す。

「あの…どなた？」

とりあえず尋ねてみる。

「これは失礼。私は太田豊太郎といいます。日本から来ました。

通りかかったところ、何か困っているみたいでしたので…

ともかく、力になれることがあったら何でも言ってくださいね。」

…初対面だというのに人がいいことだ。

何はともあれ悪人ではないらしい。一度話をしてみる。

「私はエリスと申します。どうか力を貸してください。」

そう言って私は困っていることの事情を話す。

父が死んだこと。お金に困っていること。その他もろもろ。

彼は真剣そうな顔をして私の話を聴いていた。

しばらくして、彼はこっちに向かって笑いかけた。

「とりあえず家まで送って行きます。ここじゃ落ち着かないでしょう。

泣いているところなんて人に見せるものじゃないですから。」

…初対面だというのに本当に人がいいことだ。

本当に彼は私に力を貸すつもりなんだろうか？家に入れていいのだろうか？

そんな疑念さえ浮かんでくる。

———ただ、私の中の第六感は違う印象を持っていたらしい。

「この人は信用していい。」

私は彼を家へ連れて行くことにした。

家といってもマイホームというわけではなく、座長もいるんだけど。

早足に彼を家まで連れて行き、そっと扉を開ける。

座長に見つからないためだ。

人を連れている姿なんて座長に見つかったらどうなるかしれたもんじゃない…

「うげッ!! 座長!」

…思わず叫びそうになった。

扉の向こうに座長が立っていたのだ。

相変わらず、むすっとした愛想の悪そうな顔をしている。

今日は人を連れているというだけあって、とことん機嫌が悪そうだ。

座長は見向きもせず私たちの横を通り過ぎ、扉の前へと向かうと、

思いっきり扉を閉め切った。

…当然ながら、轟音が鳴り響く。

あまりの音に座長も飛び上がっていた。

座長はそそくさと奥へと帰っていく。

「馬ッ鹿みたい。」

彼には聞こえないようにそっと悪態をつく。

一方の彼はというと、その場で呆然と立ち尽くしていた。

まあ…当然といえば当然の反応なんだろう。

座長には初めて会ったことなんだし。

「ちょっと気の毒な気がするかなあ…」

そう思いながらも、彼を自分の部屋へと招く。

ともかく、改めて話をすることにした。

さっき話した内容に加え、座長のことも話しておく。

今の彼なら間違いなく座長の酷さは理解してくれるだろうし。

「哀れな私にどうか力を貸してください。」

私は祈るような目付きではらはらと涙を流しながら語りかける。

実はこの姿、私が人に頼み事をする時の必殺ポーズだったりする。

ちなみに、この姿の私を前にして私の頼みを断れた男はいない。

…座長以外。

しばらく悩んだ後、彼は彼は時計を外して、これを売rinaさいと言う。

どうやら彼もまんまと罠にはまったようだ。

表現に若干聞こえの悪い感じがするのは気にしないこと。

何はともあれ、彼は私のことを本当に心配してくれている。

ありがとうございますと言う私の顔が微笑んでいた。

もちろんこれは演技ではない。

「それじゃあ、また。」

彼が別れの握手をしようと右手を差し出す。

私は少しためらう。そして、彼の手を握って手の甲にキスをした。

うん。つまりは、最高の敬意を表す挨拶をしたのだ。

彼は照れ臭そうに笑顔を見せる。私も満足気な顔をする。

これを書くのは今更な感じもするが、私は彼が嫌いじゃない。

こんなひよんな出会いもあるってものだ。

「うん。これでいい。」

私はそっと自分に言い聞かせた。

———その後、私と豊太郎は幸せな日々を送ることになる。

母と一緒に生活し、少ない給料を分かち合う毎日だ。

以前の私にはたまらなく羨ましいに違いない。

この暮らしがずっと続けばいい。彼もそう思ってくれている。その筈だ。

でも、そんな日々は永くは続かなかった。

彼の友達と名乗る相沢という男がやって来たその日。私の世界は変わった。

豊太郎はこの国を去る。そう伝えていったのだ。

——彼は数週間ぶりに目を覚ました。

前に高熱で倒れて以来、ずっと寝込んでいたのだ。

彼からすれば、感動の再開といったところだろう。

もともと、今の私には関係のない話だが。

「エリス…!」

彼が私を見つけて思わず声を上げる。

対する私は不機嫌そうに彼を見つめる。

本来なら涙でも流して抱きかかっているところなんだろうが、

今の私は別の意味で彼に飛び掛りそうである。

私は改まった口調で彼の名前を呼んだ。

「豊太郎。」

彼が不思議そうに私の方を向く。

まさかこの男は私が帰国のことを知っていることなど夢にも思っていないのだろうか？

思わず腸が煮えくり返りそうになる。

「この間、相沢さんって人がこの家へやって来たの。」

彼は私は何を言いたいのか悟ったのだろう。

みるみる内に彼の顔が青に染まっていく。

都合によりこの話はここでおしまい。

3 まとめ

長い文章お疲れ様でした。

時間と気力の都合上、大きな中略がありますがそこはご勘弁ください。
僕が言いたいこととは読んでいて何となくわかったかもしれませんが、
エリスも悪い奴に成り得るんじゃないのってことです。
実際のところ豊太郎に頼ってばかりなんですから。
これを機に、エリスに関する議論が増えてくれないかなと願います。
最後に、森鷗外の舞姫の世界を壊してしまったことを詫びておきます。
すみませんでした。